

## 偽りの悔悟——『罪と罰』について——

鈴木 幹 雄

### 一

ドストエフスキの『罪と罰』は、貧しい学生ラスコーニコフの犯罪の物語である。彼は、金貸しの老婆とその妹を殺し、金を奪うが、逮捕されるのではないかという不安と苦しみに耐えかね、娼婦ソーニヤのすすめにしたがって自首するにいたる。物語は全六部二十九章と「エピソード」二章から構成され、第一部では犯行までの三日間が、第二部からは犯行以後、自首するまでの十日間の経過が、犯人の思想と感情と言動を軸に、くわしくリアルに描かれている。

1 (鈴木)

ところで、この物語を時間の軸にそって辿ってみると、それは二十三才の青年のほぼ二年間の経験を内容としてい

る。犯行の半年前、彼は犯罪に興味をもち、「犯罪について」という論文を書いて雑誌に投稿している。それから五カ月後、はじめて金を借りに行つて金貸しの老婆に会い、彼女を殺して金を奪うという計画を思いつく。そして、狭苦しい部屋の中で、ほとんど食事もとらずに、計画を検討し組たてることに熱中する。この世間から孤絶した状態から出て、ひとつの犯罪計画をいだいて下見に向かうところから作者は語り出したのであった。彼にとつて、これは空想と観念の世界から現実の世界への移行であつた。実際に彼はそこで、マルメラードフとその家族に会い、また故郷から上京してきた母と妹と再会し、妹の婚約者ルージンや誘惑者スヴィドリガイロフと対決することになる。犯行、そして自首。彼は再び現実の世界から切り離され、裁判の

結果、八年の徒刑を言い渡されてシベリアの監獄へ送られる。犯行から一年半後、彼は病気になる、それから恢復するとともに、真の悔悟が彼をおとずれる。「罪と罰」の物語は、犯行から自首までの十三日間ではなく、「犯罪の理論」からシベリアの流刑地での悔悟までの二年間の物語であり、作者は、罪人が更生していく、新しい物語を予告してこの『罪と罰』を閉じるのである。

ところで、「エピソード」を読み終わった読者は、奇妙な困惑をおぼえざるをえない。ラスコーリニコフの十三日間の物語、本編で語られた物語は犯人の自首の場面で幕を閉じたのである。犯人が自首したのであれば、彼はすでに罪を悔いていたはずではないか。裁判で彼は、何が彼に自首する気を起こさせたかという質問にたいして、「心底からの悔悟」(E1)<sup>①</sup>とはつきり答えていたのである。この証言によって、事件は、貧しい青年が貧困から脱けだすために殺人を犯し、金を盗んだが、良心に目覚めて自首して出たという、道徳的悔悟の物語と理解されて落着することになる。しかし、この証言は偽りであった。彼は心底からの悔悟などしていないのである。彼は、自分が殺した老婆をますます憎みこそすれ、済まなかった、わるかったという謝罪の気持など少しも感じていないし、後悔もしていない

のである。兄の犯罪を知り、自首する決心をきいた妹のドゥーニヤが、「苦しみを負いに行くというだけで、自分の罪の半分が洗われるんじゃないの?」と励ますように言うのと、彼はそれに激しく反発する。「罪? なにが罪だ?」「ばくがああのがらわしい、有害なしらみを、だれにも必要のない金貸しの婆アを、殺してやれば四十もの罪障が償われるような、貧乏人の生き血をすっていた婆アを殺したことが、そんなに罪なのかい? ばくはそんな罪のことは考えない、それを洗い浄めようなんて思わない」(VI7)。ラスコーリニコフは自首する直前になっても、自分の罪を認めていない。老婆の殺害は彼にとって犯罪ではないのである。その考えは、公判での証言にもかかわらず、流刑地シベリアの監獄へ行ってからも変わらず、彼を苦しめる。

「ああ、もしも自分で自分の罪を認めることができるのだったら、彼はどんなにか幸福だったろう!」(E2)と作者は述べている。してみると、『罪と罰』の物語を、犯行―悔悟―自首という世の常の道徳的枠に納めて理解することとはできないことになる。では、なぜ犯人は自首するのか。不思議なことに、ラスコーリニコフにもそれが分からない。妹と別れて、最後の道を歩きながら、彼はつぶやく、「すべてがそうなる、本に書かれたとおり、そうなるしかない

と自分でわかつているのに、なぜおれはいま、行こうとするんだ！」(Ⅶ7)。主人公のつぶやきを記述する作者は、それをありのままに描くだけで説明しようとはしない。読者は説明なしに、ラスコーリニコフの経験する現実には、不可解な現実と直面させられる。

## 二

夢のような、いや、悪夢のような現実。犯罪の計画にしたがつて孤独な世界から出たラスコーリニコフは、論理的にはつきりした世界(観念の世界)から理解しがたい現実の世界に降りてきたとでもいうようであった。実際、作者は、犯行の下見から自首にいたる、ラスコーリニコフの十三日間の経験を、さまざまな文芸的仕掛けをもちいて悪夢の世界として描いている。つまり、夢見る者は、自分の経験を意識するが、判断し、意志することができない、そのように彼は現実を体験するかのようである。犯行の前日、彼はふとした偶然から、犯行にとって不可欠の情報、金貸しの老婆アリョーナ・イワーノヴナがひとりきりで家にいる時間を知ってしまう。彼はこの偶然に戦慄するほど驚く。「最初の驚きの感情は、しだいに恐怖感に変わり、背筋を悪寒が走るようだった。彼は知ってしまったのだ」(彼は

死刑の宣告を受けた男のように、部屋にはいった。彼は何も考えなかったし、まったく考えることができなかった。ただ自分の全存在で、自分にはもはや考える自由も意志もないということ、すべては突然、最終的に決定されてしまったのだということを、ふいに感じたばかりだった」(Ⅰ5)。また、凶器の斧を手にいれた事情、さかのぼって、犯罪を着想した折の偶然の符合、それらを考えあわせて事件をふりかえってみたとき、「彼はともすればその全体に何か異常な、神秘的なものを見ようとした。つまり、ある特殊な力とか偶然の暗号が働いたように感じてしまうのだ」(Ⅰ6)と作者は指摘している。

事件全体を包む「何か異常な、神秘的なもの」を、ラスコーリニコフは流刑地シベリアの監獄で、熱にうかされながら見る悪夢としてふたたび体験する。それは、疫病のために全世界が、ごく一部の選ばれた人たちを除いて滅びていくという、黙示録的終末の夢である。疫病をはやらせる病原体は、「知力と意志を授けられた精霊」であって、これにとり憑かれた人びとはたちまち発狂し、自分が聡明で、不動の真理をつかんでいると考えた。「人間はかつてこれほどまで、自分の判断、自分の学問上の結論、自分の道德的な信念や信仰を不動のものと考えたことはなかった」

(E2)。この夢のあと、ラスコーリニコフは病氣から恢復するとともに、新しい生に目覚める。この場合、夢とその正しい解釈は夢を見た者に治癒的効果をおよぼしたのであろうか。もしそうなら、この事件は、「知力と意志を授けられた精霊」、人を発狂させる悪霊にとり憑かれた者によつてひき起こされたと、作者は示唆していることになる。

悪霊に憑かれたラスコーリニコフという作者の想定は、『罪と罰』の物語がペテルブルグを舞台にしていることとも結びつく。ペテルブルグはロシア帝国を支配するためにネワ川の河口に建てられた人工都市であった。地方出身のラスコーリニコフは、大学に通っていたころ、ネワ川にかかる橋の上から寺院や宮殿の壮麗な景色に見いては、何かすっきりと割り切れぬ印象を受けていた。「この壮麗な眺望がいつも、なぜとも知れぬうそ寒さを彼に吹きつける。このはなやかな一幅の絵画が、<sup>おうし</sup>啞、<sup>みみしい</sup>聲の悪気にみだされていくように彼には感じられるのだ」(II2)。「啞、聲の悪気」という聖書に由来するこの表現で、作者は、ペテルブルグを悪鬼・悪霊に支配された地獄であることを暗示している。<sup>④</sup>『罪と罰』の世界は、時間的にも空間的にも、悪霊の息吹にみだされた世界として設定されている。

悪霊に憑かれたラスコーリニコフという作者の設定を受

けいれるならば、私たちはいつそう注意深くこの物語を読まなくてはならないだろう。その世界は単純に私たちの世界と地続きではないが、しかしまったく架空の、狂気の世界と片付けるわけにもいかない。江川卓がくわしく分析しているように、金貸しの老婆がロシア民話に登場する魔女ババ・ヤガーで、彼女を斧でうち倒すラスコーリニコフは魔女退治の英雄ということになるとしても、私たちは『罪と罰』を一篇のお伽話とみなすわけにはいかないだろう。

お伽話にこめられた寓意を読みとるには、現実を理解しておかなくてはならない。ラスコーリニコフが悪霊に憑かれて発狂したとしても、その発狂の兆候はどのようなものなのか。その具体的な理解がなければ、私たちは彼の狂気を理解したことにはならない。それが、『罪と罰』の世界を理解する入り口であり、その世界から脱け出して正気の世界へもどる出口でもあるだろう。それはどこにあるのか。

ドストエフスキーは、登場人物の思想や感情、言動をリアルに描くだけで、それを説明しようとはしない、と先に述べた。しかし、ラスコーリニコフが理解していないということを、ドストエフスキー自身が批判的に指摘する箇所がある。「エビログ」第二章で、ラスコーリニコフが監獄で、なぜ自分は自殺しなかったのか、という考えに苦し

んだと述べたあとで、こう付け加えている、「彼は苦しみが、しきりとこの問いを自分に発したが、しかし、川のほとりに立ったあのときすでに、彼がおそらくは自分の内部に、自分の信念の中に、深刻な虚偽を予感したはずだということは理解できなかった。彼はまた、この予感こそが、かれの生涯における未来の転機、彼の未来の復活、未来の新しい人生観の先ぶれとなりうるものであることを理解していなかった」(E2)。

自分の内部に、自分の信念の中にある「深刻な虚偽」、それに気づき、それを正すことが、狂気から脱けだす道だとドストエフスキーは考えているようである。そうだとすれば、『罪と罰』は、「深刻な虚偽」をかかえた青年が何をし、どんな苦しみをなめるかを描いた物語とみなしてもよいのではないか。たしかに、『罪と罰』の六分の五は、殺人を犯した青年の苦しみを描いているのであり、それは「良心の呵責」というありきたりな言葉で処理できるほど単純ではないのである。そして、その「深刻な虚偽」に近づく手がかりとなる、もつとも明らかな虚偽は裁判におけるラスコーリニコフの証言、「心底からの悔悟」という言葉である。

### 三

作者は、彼が裁判でこう証言したと報告している。

「いったい何が彼に殺人の気持を起こさせ、強盗を犯させるにいたったのか、という最後の質問にたいしては、彼はきわめてはっきりと、また常識はずれなほど明確に、すべての原因となったのは彼の悲惨な状態、貧しく寄るべない境遇であり、また老婆を殺せば手にはいると当てこんでいた最低三千ルーブリの金で、自分の出世の第一歩を固めたいという願ひであつたと答えた。彼が殺人を決意したのは、貧困と不成功のためにいつそういらだっていた、彼の軽薄で小心な性格の結果であるということだった。また、何が彼に自首する気を起こさせたかという質問にたいしては、心底からの悔悟であるとはっきり答えた。こうした彼の受け答えは、ほとんど乱暴にさえ思えるほどだった……」

(E1)

この証言は、犯罪の原因と動機と自首の理由を語って、世間的道德意識をじゅうぶん納得させるものであつた。かくして彼の犯罪の物語は、貧しい青年の悔悟の物語、感動的でさえある良心のお話となつたのだつた。だが、この証

言は不十分であり、「心底からの悔悟」ということに關しては、すでに見たように、まったくの偽りであった。そこでは、犯罪の基礎になったかれの独創的な理論、殺人を正当化する正義のための計画が少しも触れられていない。事件を担当した予審判事ボルフィーリイが、自首の前日に彼を訪ね、自首をすすめた時に約束したとおり、「うまく仕組んで、取りつくろつて」(VI 2) くれた結果であつた。

ラスコーリニコフが犯罪の計画を思いついたのは、犯行の一月半ほど前、知合いから聞いていた金貸しのアリヨナ・イワーノヴナのことを思いだし、質草をもつて出かけたときだつた。「婆さんの住居を捜しだしてみると、一目会つたときから、まだ彼女については、これといつて何も知らないのに、むしろに嫌悪感をおぼえた」。帰り道、一軒の安料理屋にたち寄り、「お茶を注文して、席にかけると、彼はすっかり考えこんでしまった。卵からかえろうとする雛がやるように、奇怪な考えがかれの頭を内側からこつこつといばみ、彼の心をぐいぐいと捕えていくのである」(I 6)。この時、隣のテーブルで学生と若い将校がたまたま、アリヨナとその妹リザヴェータの噂話をしてゐるのを耳にする。そして、「ぼくは、あの冀婆さんなら、たとえ殺して金をとつても、いっさい良心の呵責を感じな

いね、賭けたつていい」(同)と学生が言うのを聞いて、彼はぎくりとする。いま、彼が考えていたと同じ事を他人の口から聞くことになつたのだ。

「……一方には、おろかで、無意味で、くだらなくて、意地悪で、病身の婆さんがいる。だれにも必要のない、それどころか、みな害になる存在で、自分でも何のために生きているのかわかつていないし、ほつておいてもじきに死んでしまふ婆さんだ。……ところがその一方では、若くびちびちした連中が、だれの援助もないために、みすみす身を滅ぼしている。……修道院へ寄付される婆さんの金があれば、何百、何千という立派な事業や計画を、ものにすることができる！ 何百、何千という人々たちを正業につかせ、何十という家族を貧困から、零落から、墮落から、性病院から救いだせる。(中略) じゃ、彼女を殺して、その金を奪つたらどうだ？ そして、その金をもとに、全人類の共同の事業に一身を捧げるのさ。きみはどう思う、ひとつの生命を代償に、数千の生命を腐敗と墮落から救うんだ。ひとつの死と百の生命を取りかえる——こいつは算術じゃないか！」(同)。

ラスコーリニコフの心に芽生えた考えが、ちようどその

とき、見ず知らずの学生の言葉によって語られたのである。取るにたりない婆さんを犠牲にして、数千の生命を救う、これは正義の実現ではないか。まして、この婆さんが有害で、「他人の生命をむしろばんでいる」(同)のであれば、なおさらである。勸善懲惡という言葉に示されている素朴な正義の観念によれば、悪を懲らしめることは正しいのである。悪を滅ばし、人々を救うことは、正義の行いに他ならない。これは功利主義の原理である。もちろん、殺人そのものが善なのではない。この場合、殺害は犠牲を捧げる行為であり、犠牲を執行する者が「全人類の共同の事業に一身を捧げる」という自己犠牲(献身)によって、殺人を崇高な事業のために必要な手段とするのである。「ひとつの死と百の命を取りかえる」算術が成り立つためには、この献身という結び目が不可欠である。献身の決意なしに、正義のための殺人を語っても、それはよくある平凡な青年たちの議論であり、単なるお喋りにすぎない。「ぼくは、あの婆さんなら、たとえ殺して金をとっても、いっさい良心の呵責を感じないね」といった学生も、若い将校から「きみは自分で婆さんを殺すのか、殺さないのか？」と問いつ返されると、「もちろん、殺すもんか！ ぼくは正義のために言っただけで、……ぼくがどうのという問題じゃない

……」と言葉を詰まらせる。「ぼくに言わせりゃ、きみ自身がやるんでなければ、正義もへちまもないと思うな？ もう一勝負行こうや！」(同)と、彼らは正義の問題を打ちきって、ビリヤードを楽しむのである。

彼らの会話は、何かの予言、天啓が含まれていたかのようになり、ラスコーリニコフに異常な影響を与えた。ラスコーリニコフはゲームに気晴らしを求めようとはしない。彼は、正義のために語るのでなくて、「自分でやる」ことへ向かうのである。彼は殺人を、正義の実践の問題として自分に課す。

#### 四

それにしても、ラスコーリニコフはなぜ、正義の問題を「自分でやる」課題としてひき受けようとしたのか。ローザノフは、『罪と罰』にふれて、「はけ口のない苦悩の中で、滅亡者および滅亡せんとする人間の姿を見て、この主人公の清浄な魂が激昂し、彼は人間不可侵の法則を乗り越えようと決意する」<sup>⑥</sup>と述べているが、この解釈はいささか極端にすぎるのではないか。貧しさの中で滅びる者への共感的同情、正義が行なわれるようにという願い、それは多くの人の心にある。だが、「神の御心が地にも行なわれるよう

に」という祈りを心から捧げたとしても、なんの地位も力もない貧しい学生が、自分で正義を代行しようなどと決心するだろうか。清浄な、激昂した魂に、例えば、皇帝暗殺といった計画ならふさわしいが、全人類の共同の事業に献身しようとする者に、身近な金貸しの婆さんを殺すという着想は不釣り合いではないか。崇高な目的と卑小な犠牲、これでは、原理的には問題はないにしても、「美的見地から見てあまり上等な形式ではない」(VI 7)。だから、この場合は、貧困への憤懣と貧しい者への一般的な憐れみとが、一目会って生じた老婆への嫌悪感(老婆への「むかつく」という感情)と結びついて、殺意を生んだにすぎない。

だが、彼の「悲惨な状態、貧しく寄るべない境遇」はいまに始まったことではない。老婆への嫌悪感が彼女への殺意を生み、犯罪の計画にとりかかるようにさせるには、もっと別の何かがなくしてはならないだろう。それは、犯行の半年ほど前、「犯罪について」の論文を書いたことにみられる、彼の犯罪への関心ではないか。その論文は、ある本について書かれたものであるが、内容は、犯行過程における犯人の心理を考察したものである。彼は、「なぜ犯罪というものは、ほとんど例外なく、ああも簡単に嗅ぎつけられ、露顕してしまうのか」(I 6)という疑問を解決しよ

うとする。彼の意見によると、ほとんどすべての犯罪者が、犯行の瞬間に、意志と判断力の一種の喪失状態におちいり、軽率な失敗をしてしまう。この判断力のくもりと意志の阻喪は、病氣のように犯罪にともなうという。「こういう結論に達すると」と作者は付けくわえている、「彼はさつそく、彼自身は、彼の場合には、こういう病的な変化は起こりえない、かれの判断力と意志は、その目論見を実行していく全過程を通じて、いささかもくもらされることはない、と決めこんでしまった。その理由はただひとつ、彼の目論見が、「犯罪ではない」からである」(同)。

「彼の目論見は犯罪ではない」とはどういうことか。その説明は省略されているが、その基礎となる思想は論文で暗示的に述べられていたらしい。その論文を雑誌で読んだ予審判事ボルフィーリイによれば、「あなたの論文は不合理な、空想的なものでしたがね、あそこには真情から出たもの、何物とも妥協しない若々しい誇り、向こう見ずな大胆さがちらつていました。陰鬱な調子の論文でしたが、それがいいんですよ。私はあの論文を読むと、それをわきに置きました。で……わきに置いて、こう考えたのです。「いや、この男はただじゃすまないぞ!」って」(VI 2)。だからボルフィーリイは、老婆殺害の事件後、ラスコーリ

ニコフを犯人と疑い、その思想を話題にして彼を挑発する。ラスコーリニコフはその挑発に応じて、彼の思想をくわしく説明するのである。

第三部第五章でラスコーリニコフ自身が説明する根本思想によると、人間は凡人と非凡人の二つに分類される。大多數の凡人は服従を旨とし、世界を維持する。非凡人はニエトンやナポレオンのような、真理の発見者、新しい法の制定者である。平凡な人間たちと偉人・英雄との区別はとりたてて珍しい説ではないが、彼の場合には、これら非凡人が「自分の環境のなかで新しい言葉を発する天賦の才」というか能力を持っている人間」とされていること、また、「法の枠をふみ越える人たち」、破壊者、犯罪者とみなされている。彼によれば、「いくらかでも軌道はずれた人間、つまり、いくらかでも新しい言葉を言える人間は、その本質上、かならず犯罪者にならざるをえない」(Ⅲ5)。「彼らの大多數は、さまざまな声明を發して、よりよき未来のために現在を破壊することを要求します。しかも、その思想のために、たとえば、もし屍をふみ越え、流血をおかす必要がある場合には、彼らは自分の内部で、良心に照らして、流血をふみ越える許可を自分に与えることができ(る)」。法をふみ越える、犯罪への権利、流血を許す良

心。ラスコーリニコフの「凡人・非凡人」論はあまりにも多く犯罪や流血に言及してはいないか。分別のある友人ラズミールヒンは、そこに異様な印象を受けて、こう指摘する。「いまの話のなかで、本当に独創的なこと、本当にきみひとりに属していることと言え、恐ろしいことだが、それはきみが究極において、良心に照らして流血を許している点なんだ。しかも失礼だが、非常に狂信的にね」(同)。非凡人の良心は(もし非凡人に良心があるとすれば)、自分に流血を許す、これがラスコーリニコフの思想の根本である。

ラスコーリニコフの根本思想は、冷静に検討すれば、不合理で、空想的である。だが問題は、思想の整合性にあるのではなく、それが、ひとりの青年の「抑圧された、誇らしい熱情」の産物である、という点にある。不遇の内で、英雄に憧れ、自負心のある青年がこのような「非凡人」説を考えだし、それを確信しているならば、それを自分に当てはめないことがあるだろうか。それを自分に当てはめ、自分を非凡人になぞらえない者があるだろうか。しかも、その思想は「新しい言葉」、独創的な思想なのだ。「自分の目論見は犯罪ではない」という考えは、彼が自分を非凡人とみなしていたことを示している。だが、それはまだ自分

だけの確信であり、空想にすぎない。それが空想でなく、現実裏打ちされた確信であるためには、それを検証する必要がある。いかにして。自分の良心が流血を許すかどうか、それを確かめることによって。ラスコーリニコフの鬱屈した誇りは、自己の思想を信じ、それを検証するために実験を求める、つまり、犯罪をひとつの試みとしてひそかに求めているのではないか。だから、一目会っておぼえた金貸しの老婆への嫌悪感が、その欲求にひとつの具体的目標を与えて、小さな殺意を触発し、見知らぬ学生の語る「正義のための計画」を自分の実行すべき課題として心に根づかせたにちがいない。

## 五

ラスコーリニコフを執拗に挑発するポルフィーリイは、ずばりと問いかける、「あなたは自分のことを、ほんのちよっぴりとしても、自分も(非凡な)人間、つまり、あなたの言われる意味で新しい言葉を語る人間と考えられたことはありませんか」、「もしそうだとするとすな、あなた自身も決意されたのちがいますか——まあ、生活上の不如意とか、窮迫とか、ないしは全人類への何かの貢献とかを頭におかれて、障害をふみ越えることをです。たとえば、

人を殺して強奪するとか?」(同)。ラスコーリニコフの論文を理解し、危険を予感したポルフィーリイは、ほぼ正確に彼の思考の道筋を見ぬいている。だが、自分の言葉の新しさを確信することと、ほかならぬ自分が良心に照らして流血を自分に許すこととは別である。いや、それを別のことと考えて、人類への貢献のために流血を犯すことは許されるのか、という問題を解決しようと努めること自体、彼の思想の破綻を意味しないか。しかし、殺意をいだいて犯罪を計画しはじめたラスコーリニコフにとって、当面の問題は、老婆の殺害を良心に照らして正当化することであり、彼はまる一月の間、犯罪の方法的な面、「いつ、どのようにして」ということよりも、「問題の道徳的な面」(I 6)の解決にとりくみ、意識的には反駁の余地のない論理を仕上げたのであった。

人を嫌悪したからといって、その人を殺してよいとは言えない。しかし、嫌悪感も憎しみもなしに、殺意をもつこともできないだろう。殺意を生むのは特定の対象にたいする個別の嫌悪なのである。だが、殺意が利己的であるならば、それを理論的に認することはできない。彼の理論的反省は、殺意の利己性を忘れ、計画によき目的を与え、善悪の功利主義的算術において善の数値をできるだけかめ

るために、いちばん無益な者を犠牲に選び、「第一步を踏みだすのに必要なだけの」三千ルーブリの金をとることにしたのであった。もちろん、よき目的のために献身する、自分の生涯を捧げることは、殺害と人類への貢献、手段と目的とをむすぶ論理的に不可欠の条件である。

犯罪を是認する根本思想があり、正義のための計画も理論的に仕上がり、あとは実行あるのみ。しかし、ラスコーリニコフは実行に踏みきれない。彼はためらい、考えつづけ、考えることにうんざりし、「ひとつ行つて、ためしてみるか、空想してゐるばかりが能じゃない」(I 6)といった程度の気持で、彼の閉ざされた孤独の部屋を出たのであった。そしてたちまち、彼の「目論見」は現実のきびしい試験にさらされることになる。

殺意のない殺人の観念は、かすかに想像力を刺激するただの言葉にすぎない。殺人の計画は、殺意が狙う目標へ心をむけ、心のうちで殺人を犯すことではあるが、まだ空想のうちに止まる。彼が優柔不断に、なんども計画を思いかえすうちに、「例の《醜惡な》計画をもう既定の計画のようになれてしまった」(I 1)としても、そこには計画を現実化する力が、行動のバネとなる感情が欠けていた。だが、試しに老婆のもとへでかけた彼は、予定

の道を歩き、犯行がなされるはずの部屋の情景を実際に見て、生々しい想像に圧倒され、自分の計画に激しい嫌悪感をおぼえ、打ちのめされてしまう。この嫌悪感、計画に対する心のこの激しい反発が彼を無力にし、計画の推進を妨げるとは、彼の予想できないことであつた。

彼を犯行へ駆りたてたのは、下見の帰りに安酒場で会つた、酔いどれのマルメラードフの悲惨な境遇と、母から届いた手紙であつた。マルメラードフは、初対面のラスコーリニコフに、家族とともにペテルブルグへ流れつくまでの事情と、継母に強要されて家族のために娼婦となつた娘のソーニヤの身の上をくわしく物語る。だがラスコーリニコフは、酒に身をもちくずして自ら自己を卑下し、娘を犠牲にして恥じないマルメラードフに人間一般の卑劣さを見たのである。「人間つて卑劣なやつは、何にだつてなれっこになるんだ」(I 2)。同時に、自ら犠牲となつたソーニヤの姿は彼に忘れがたい印象を与えた。このマルメラードフの家族の構図は、他人事ではなかつた。翌朝、留守の間に届いた母からの手紙を読んで、ラスコーリニコフは状況の窮迫を知ることになる。手紙によれば、妹ドゥーニヤが婚約し、結婚のためにまもなく母娘でペテルブルグに上京するという。彼女の相手はルージンという、四十五才で、裕

福な、もう自分の財産もある実務家である。彼はその文面から、妹が兄のために財産家と結婚しようと決意し、母親もそれを知りながら容認したことを察知する。いまや妹が愛する兄のために犠牲となり、身を売ろうとしている。自分がその犠牲を受け入れることは、マルメラードフ同様の卑劣漢になることなのだ。「ぼくの生きてるかぎり、そんなことはさせない、させない、させるもんか！」だが、彼は反問する、「させない？　じゃ、そうさせないために、おまえは何をするんだ？　禁止するだ？　だがおまえにそんな権利があるのかい？　その権利と引きかえに、おまえは何を約束できるんだ？」(I 4)。

妹の婚約は、彼への献身を表すだけではなかった。それはいまさらながら、彼の生活が家族の犠牲に支えられてきたという事実を彼に突きつけた、いや、以前から彼を悩ませてきた疑問に切迫した形で回答を要求したのである。しかし、彼は無力である。それだけにいつそう行動への衝迫は強まる。「明らかにいまは、……是が非でも何かをしなければならぬときだった。それも、いまだちに、一刻も早く。どうあつても何かを決行しなければならぬ、せめて何かを、でなければ……。でなければ、完全に人生をあきらめるんだ！」(同)。追いつめられた状況のなかで、

まるで生きようとする意欲が出口を求めるように、彼はあの計画にしがみつく、「いまは、それがふいに空想ではなく、なにやら新しい、恐ろしい、彼にとってまったく未知の形をとって現われた」(同)。

犯行への衝動とそれに対する嫌悪と拒否(「おれにはもちこたえられない！　耐えられない！」)のあいだで動揺し、一日の彷徨の後、彼はあの運命的な偶然によってリザヴェータの立話を聞くことになり、「自分にはもはや考える自由も意志もないということ、すべては突然、最終的に決定されてしまったのだ」と感じる。翌日、夕方に目覚めた彼は、偶然に助けられて(「分別じゃなくって、悪魔のしわざだ！」)(I 6)刑場へ引かれて行く死刑囚のような気持で老婆のもとへ行き、彼女を殺す。

## 六

ラスコーリニコフは、後に、ソーニャに罪を告白したとき、「あんな殺し方があるだろうか？」と言っているが、その殺し方を作者は、こう描いている。

「もう一瞬の猶予もならなかった。彼は斧をすつかり取りだし、なかば無意識のうちに両手でそれを振りかぶると、ほとんど力をこめず、ほとんど機械的に、

頭をめぐって斧の峰をふりおろした。そのときは、まるで力がなくなってしまうようだった。だが、一度斧をふりおろしたとたん、彼の身内には新しい力が湧いてきた」(17)。

犯行の頂点とも言うべきときに、意志も感情もなく、一種の麻痺状態で、犯行が演じられる。しかも斧の峰で。斧が振りおろされるや、呪縛がとけたように、生気がよみがえる。その直後、外出からもどってきたリザヴェータが凶行の現場を見て驚き、立ちすくんでいると、気配を察したラスコリニコフは、寝室から老婆の倒れている部屋へもどり、「斧をかざして彼女にとびかかって行つた。(中略)斧の刃はまともに頭蓋骨にあたり、一撃で額の上部をこめかみのあたりまでぶち割つた」(同)。思いがけない目撃者に会つて、彼は考える間もなく、本能的に、自分を護るために、リザヴェータに襲いかかり、斧の刃で、相手を殺すのである。奇妙なことに、この第二の殺人はほとんど彼の心に印象を残さない。彼の記憶に残るのは老婆の死であり、老婆への憎しみである。

犯行は観念でしかなかった殺人を現実にした。観念ならば、断念しふり捨てることも可能であった。しかしいまや、観念は事実となり、否定しようのない現実として彼につき

つけられている。だが、その事実はまだ彼ひとりの事実である。自分ひとりの事実なら、それが錯覚、幻想でないと言いきれないだろう。秘密を抱えた犯人が現場にもどるのはその現実性を確かめるためではないのか。あるいは、その秘密を他人にうち明けたいと思うのは、事実を共有することで犯行の現実性を確認したいからではないのか。ラスコリニコフは身をまもるために、自白したいという奇妙な欲求をおさえるのに苦労するが、そのため殺人の事実は観念の被膜をとおして意識されることになるのである。殺人を自白することは、事実をあらわに認めること、それは同時に殺人という罪の事実から、自分が非凡人であることを検証するための実験という意味づけや、全人類の共同の事業に献身するための犠牲(手段)という正当化を剥ぎとつて、現実を認めることである。

彼の犯行の前提であつた、「自分には、犯行にともなう意志と判断力の喪失という病的変化は生じない」という信念は、すでに根拠を失つたはずである。ポルフィーリイに言わせれば、彼の犯行は「まるで足が地についていない」(VI2)。ドアを閉めるのを忘れ、金を取ることもできなかった。どうにか取つたものも、改めもしないで石の下に匿してしまふ。たしかに、実験ならば失敗ということもあ

る。理論がまちがっていなければ、実験が失敗だった可能性はあるのだ。それにかれの良心は流血を許したのではなかったのか。たとえ彼の良心が殺人の醜悪さを嫌悪し、その不潔さに責められたとしても、それに耐え、自分をもちこたえれば、彼の思想の正しさは検証されるのである。ところが、現実の経験が「自分で正義を行なう」という計画の虚偽をあばくことになる。

ラスコーリニコフをついに犯行へ駆りたてたものは、妹ドゥーニャの婚約の報せであつた。妹が自分のために犠牲になる、そう考えて彼はただ何かをするために犯行へ踏みきろうとしたのであつた。それは彼が妹を愛していたからであるが、犠牲の大きさを知っていたからでもある。しかし彼は自分がその犠牲に値するとは考えていなかった。そればかりか、彼は愛する者のために我が身を犠牲にするという考え方に同意できない。「兄のため、母親のためなら（自分を）売る！ なんでもかでも売ってしまふんだ！ ああ、人間というやつは、こういう場合になると、自分の道義心さえおし殺して、自由も、安らぎも、良心さえも、いっさいがっさい、古着市場へ持ちこむものなんだ。（中略）そればかりか、自分なりの小理屈までひねりだして、目先だけにせよ、自分を安心させる。これでいいんだ、正

しい目的のためにはこれではなくちやいけないんだと、自分に言いかけせる。これが人間というやつなんだ」（I 4）。だが、それはほんとうに正しいのか。自己犠牲ということに対する彼の批判の背後には、妹なり自分なりの人間としての価値への感覚がうかがえる。その人間の尊厳への感覚からすれば、ドゥーニャやソーニャの犠牲はあまりにも大きく、それに値するものなど（自分を含めて）あり得ない。

だが、自己犠牲への傾向が一般的だとすれば、ラスコーリニコフもまた、「小理屈をひねりだして」老婆を犠牲にし、自分をも人類のために捧げようとしたのではなかったのか。ところが、そうではなさそうである。ドゥーニャが、結婚は兄のためではない、と否定すると、彼はこう考えた「うそをつけ、自尊心の強いやつだ！ 慈善事業がしたいくせに、本音を吐こうとしない！ ああ、いやしい根性だよ！」（III 3）と。こう考えたとすれば、妹と同じく気位の高いラスコーリニコフが自尊心から、慈善事業を目的にしたにすぎないと解することもできるのである。実際、彼が母と妹への負担を負い目と感じ、妹の犠牲を拒んだのは、彼女たちへの愛からではなく、自尊心からであつた。彼の自尊心が、妹の愛による献身をしりぞけた。彼にとって、犠牲を受けいれることは、償いきれない贈与をうけること

であり、相手への従属を認め、その分、自己の独立を譲りわたすことなのだ。犯行によって状況が逼迫し、犯罪の露顕と逮捕の不安がつよまるにつれ、彼の思想は剥がれおちて行き、むき出しの生が、生への願望が意識されてくる。この意識が、自分をこの窮境に導いたものたち、老婆や母や妹への憎しみを生むのである。

非凡人の思想にもとづいてラスコーリニコフは法をふみ越える。しかし犯行後、彼は逮捕を恐れ、牢獄の生活を恐れる。生きるには、秘密のなかで、犯罪の事実を自分だけの世界に、つまり観念の世界に閉じこめておかなくてはならない。だが、現実の経験は、彼が論理的に組み立てた正義の理論（計画）に、彼自身の本性が反対していることを示している。しかし、彼はそれを認めない。彼にとって生きることは、貧しさのなかでただ生きつづけることではない。独創的な思想、新しい言葉をもつことがかれの人間としての誇りを保つ手立てであり、自尊心の支えである。彼にとって、生きることはこの思想に献身することであった。自己の思想への献身が、彼の孤独の部屋の外に広がる現実を人々と共有し、ありのままに見ることを妨げたのである。そこに虚偽が生まれる。しかし、ラスコーリニコフが愛する者だけに、彼の現実能耐えられる者だけに、犯行を告

白しているというところに、真実への可能性がありはしないか……  
(二〇〇二、一、三一)

## 註

① 『罪と罰』からの引用は、江川卓訳の岩波文庫版（全三冊、一九九九年十一月—二〇〇〇年二月）により、部章のみを記した。（E1）は「エビローグ」第一章を表し、（VI7）は第六部第七章を示す。六、七種類ある翻訳のうちどれを参照してもさしつかえないと思うので、引用注は部章を記し、煩雑を避けて頁数は除いた。

② 第五部第四章で、ラスコーリニコフはソーニャへの告白のなかで、すでにこう言っている、「もしばくが飢えのために殺したのだったら、ばくはいま……幸福だったろうと思う。そうなんだよ！」。

③ 江川卓『謎とき「罪と罰」』（新潮選書、新潮社、一九八六年）参照。

④ 同書Ⅳ「ペテルブルグは地獄の都市」。他に、清水正『ドストエフスキー「罪と罰」の世界』第二十七章（創林社、一九八六年）参照。

⑤ 江川『同書』Ⅷ「ロシアの魔女」参照。

⑥ ローザノフ『ドストエフスキー研究』神崎昇訳（彌生書房、一九六二年）p. 57-8.